

東日本大震災保健支援に派遣されて

杉原智始

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科公衆衛生学分野

(平成 23 年 5 月 9 日受理)

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に岡山県保健支援チームの連絡調整員として岩手県大船渡市に派遣されましたので、報告します。

はじめに

この度発生した東日本大地震・大津波により、避難所生活を余儀なくされている被災者の多くは住居、衣類等を無くし、着のみ着のまま、自分の身ひとつで避難しているうえ、近親者を行方不明または亡くしている。また、避難所生活の長期化が予想され、精神面のケアが必要であるため、厚生労働省は都道府県、市町村と協力して被災地へ、医師、保健師、栄養士を派遣している。



被災した子供達と折り紙を楽しむ筆者

現地の状況

平成 23 年 4 月 7 日、医師、保健師 3 名と共に大阪伊丹空港から空路、岩手花巻空港に入り、前任者から引き継いだ車を運転して遠野市の宿泊所に向かった。宿泊所までの道沿いは地震の被害が無いように見えたが、夜 11 時 33 分震災後最大の震度 5 弱の余震に見舞われ、翌日夕方まで停電、電話不通による情報遮断を経験した。

翌日、岩手県大船渡合同庁舎で岩手県職員より注意事項の説明を受け、自身も被災者である保健師より、生き残った我々が復興していかなければいけないのです。もし大きな地震が

発生した場合、人を助けようと思わないで、すぐ高い所まで逃げてください。人を助けようと思うと自分も死にます。人を助けようとした人は死んでいますと聞かされた後、避難所となっている大船渡地区公民館、大船渡中学校体育館へと向かった。避難所へ向かう道路上の瓦礫は撤去されて、両脇に山積みされていたが、道路から少し奥の瓦礫は手つかずの状態であり、後で聞いた話によると、山積みされている瓦礫以外は遺体の確認出来ていないそうである。



幹線道路沿いの瓦礫

大船渡地区公民館に約 120 名、大船渡中学校体育館に約 300 名の被災者がおられ、どちらの避難所とも高齢の避難者が多く、プライバシーが保てている状態ではなかったが、多くの被災者からは、私達はここに避難することが出来、炊き出し等により食事が取れ、寝ることも出来る、まだ恵まれていると聞かされた。また、遠慮される方が多く、保健チームから体調を聞かれ、少し体調が悪いにもかかわらず、自分より体調が優れない人がいるうえ、皆さん忙しいので言えなかったと言う声も多く多く聞こえた。子供達は一見元気そうに見えたが、眠ることが怖い、突然、津波を思い出し涙ぐむと話す子が見られた。

小宮山厚生労働副大臣の慰問



ハンバーガーの吹き出し

今回、私は連絡調整員として被災地に入ったため、避難所全体を見渡すことが出来、十分とは言えないが、医療、保健分野の人材は足りていたが、換気、掃除が出来ていない、トイレのタオルが何日間も交換されていない、消費期限も考えず差し入れの食品を枕元に保管する等、衛生面の管理が不十分であるため、避難所の衛生管理を行う人材が必要であると感じた。

まもなく仮設住宅が完成します。生活も少しは落ち着いてきますが、仮設入居後の生活に不安を持つ被災者が多いため、継続的な支援方法を考えて行きたいと思っている

